

小林市教育研究センター

I	研究主題と副題	7-1
II	主題設定の理由	7-1
III	研究目標	7-1
IV	研究仮説	7-1
V	研究構想	7-2
VI	研究内容	7-2
1	研究の基本的な考え方	7-2
(1)	小林市ならではの授業づくりの基本方針	7-2
(2)	研究組織	7-3
2	活用型授業研究班の取組	7-3
(1)	プチ授業実践の実施	7-3
(2)	活用型の授業の共同実践に向けたリーフレット作成	7-3
(3)	授業研究会における活用型授業の啓発	7-4
(4)	児童生徒の意識調査	7-4
3	T S M研究班の取組	7-5
(1)	指導時期一覧表の作成	7-5
(2)	アンケート集計の結果	7-5
4	I C T活用研究班の取組	7-6
(1)	I C T活用の実態調査	7-6
(2)	I C T活用の啓発促進	7-7
5	検証授業の実際	7-7
(1)	検証授業 I	7-7
(2)	検証授業 II	7-8
VII	成果と課題	7-10
1	成果	7-10
2	課題	7-10
○	引用・参考文献		
○	研究同人		

I 研究主題と副題

確かな学力を育成するための小林市ならではの授業の創造
小中一貫教育における系統的な指導の充実と知識・技能を活用する授業の実践を通して

II 主題設定の理由

都市化・少子高齢化の進展や経済的な豊かさの実現など社会が成熟する中で、家庭や地域社会はもとより、教育・学習の様々な活動に大きな変化が生じている。とりわけ児童生徒に関しては、学力や体力、規範意識など多くの面で課題が指摘されている。また、学校から社会・職業への移行をめぐる、社会人・職業人として必要な能力と勤労観・職業観を身に付けた人材を育成することが課題となっている。

本市ではこれまで、「目指せ宮崎県一、小林の学力」をスローガンの一つに掲げ、児童生徒の学力の向上に一丸となって取り組んできた。全国学力・学習状況調査や県の学力調査等から児童生徒の学力の状況を把握し、「活用」に関する問題（B問題）において全国平均をやや下回る傾向が続いていることを課題としてとらえてきた。

そこで本市教育研究センターでは、平成24年度から、研究主題を「確かな学力を育成するための小林市ならではの授業の創造」と掲げ、3カ年計画での研究を進めてきた。

1年次には、小・中学校9カ年を見通した「系統的な指導の充実」や「活用型授業」の在り方について理論の構築を図り、2年次には、1年次に構築した理論をさらに実践しやすく細分化してアプローチの仕方に工夫を加えた。さらに、市内の各学校で実践できるように研究センターの取組を普及させるための方法を研究し、実践化を図った。

これまでの研究で、小林市ならではの系統一覧表を作成したことや基礎的な知識や技能を確実に習得させるための指導の手立てとする「TSM」の作成を行ったことで、授業における小・中学校9カ年間の学習のつながりが見えるようになった。また、単元構成の基本形や言語活動の位置付け方が整理できたことで、単元レベルで活用型授業を構築できるようになった。

しかし、これまで研究内容については、市内教員に啓発を行い周知を図ってきたが、誰もが活用型授業の実践を行っているとはいえ、今後、さらに継続した研究を行い市内教員全員で共同実践できるようにすることが課題であった。

そこで、3カ年計画の3年次である本年は、副題を「小中一貫教育における系統的な指導の充実と知識・技能を活用する授業の実践を通して」とし、1、2年次の取組を市内各小・中学校で数多く実践していくことで、活用型授業のさらなる普及と教職員の指導力の向上を図ることとした。

本研究が、研究センターだけのものになってしまうことがなく、市内各小・中学校で広く実践され、各学校の教員一人一人が共通した意識をもって実践に取り組んでいくことができれば、児童生徒の確かな学力を育成する小林市ならではの授業が創造でき、本市の掲げる「『学びたい』『学ばせたい』気持ちを高める小林教育」の具現化を目指すことができるのではないかと考え、本主題を設定した。

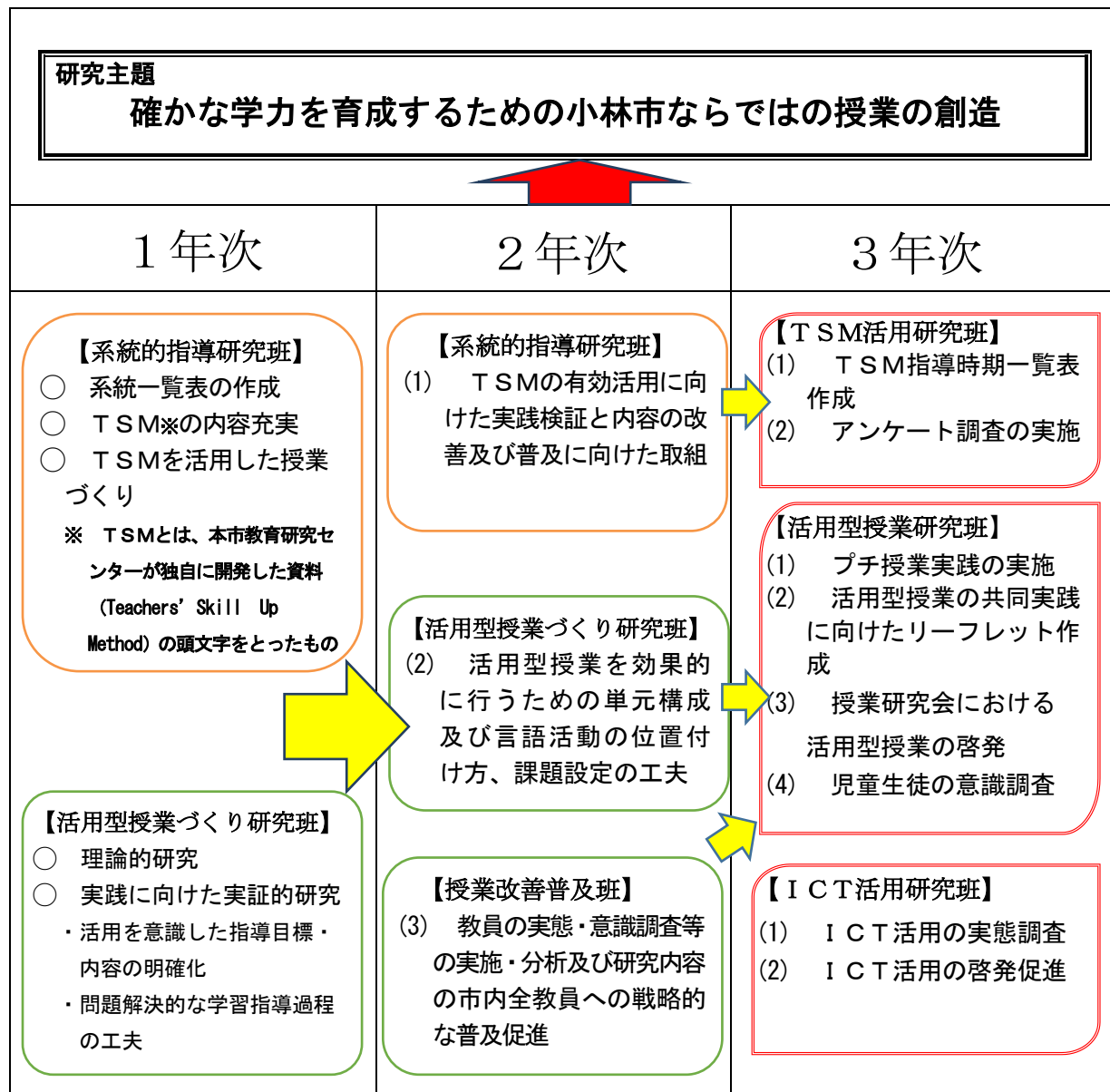
III 研究目標

児童生徒の確かな学力の育成を目指して、小林市の児童生徒の学力の現状をとらえ、基礎的・基本的な知識及び技能を活用する学習活動を中核とした小林市ならではの授業を創造する。

IV 研究仮説

これまでの研究の成果を、市内各小・中学校で広く実践することで、市内の教員一人一人が研究センターの研究に関心を持ち、課題に対して共同の意識をもって取り組むことができれば、小林市ならではの授業を創造することができるであろう。

V 研究構想



VI 研究内容

1 研究の基本的な考え方

(1) 小林市ならではの授業づくりの基本方針

本年度の研究は、3カ年計画の3年次であることから、これまでの研究を踏襲し研究の成果を検証する年と位置付ける。

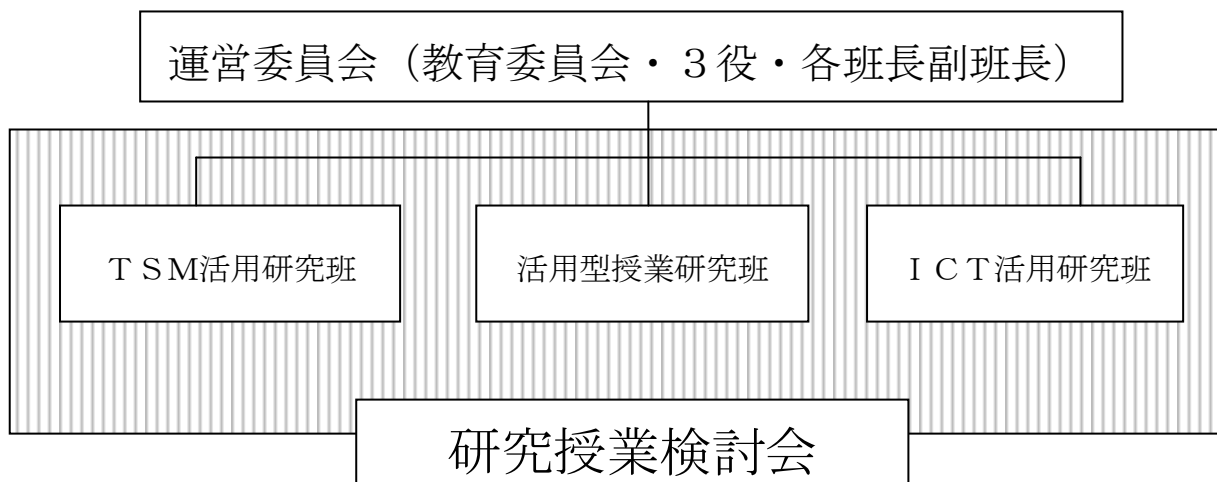
そのために、T S Mを活用し系統的な指導を充実させ、活用型授業により問題解決的な学習の中で習得した知識・技能を活用する言語活動の充実を図る授業実践を行う。このような授業を行うことにより、思考力・判断力・表現力が育まれる中で新たな知識・技能が習得され、

その知識・技能は、次時、あるいは次単元や他教科において意欲的かつ主体的に活用され、確かな学力が育まれると考える。

そこで、研究の内容としては、新たな理論の構築ではなくこれまでの研究の理論を生かし、授業実践を深めながら研究の成果及び課題を明らかにするとともに、市内各学校の教育実践と連携を図りながら小林市ならではの授業として広く根ざしていくようにする。

さらに、今年度は小林市がすすめる「学力を支えるICTの活用」を図るために、授業におけるより効果的な活用の在り方について情報提供し、各学校での積極的な活用を推進することとした。

(2) 研究組織



2 活用型授業研究班の取組

本市教育研究センターがとらえる「活用型授業」とは、問題解決的な学習を基軸としながら、基礎的・基本的な知識や技能の習得と活用の場面を効果的に位置付けた授業である。本年度は、この「活用型授業」を小林市内の教員に共同実践をしてもらうことを通して、「活用型授業」の定着が図られるようにした。

(1) プチ授業実践の実施

本研究センター員が「活用型授業」や「TSMを活用した授業」を視点とした授業（プチ授業）を6月までに実践し、授業の概要及び成果と課題について発表し合った。授業実践を通して、学習問題や課題設定における「過剰情報の付加」、「条件・制限の付加」等の在り方について協議し、過剰情報や条件・制限のとらえ方について共通理解を図ることができた。

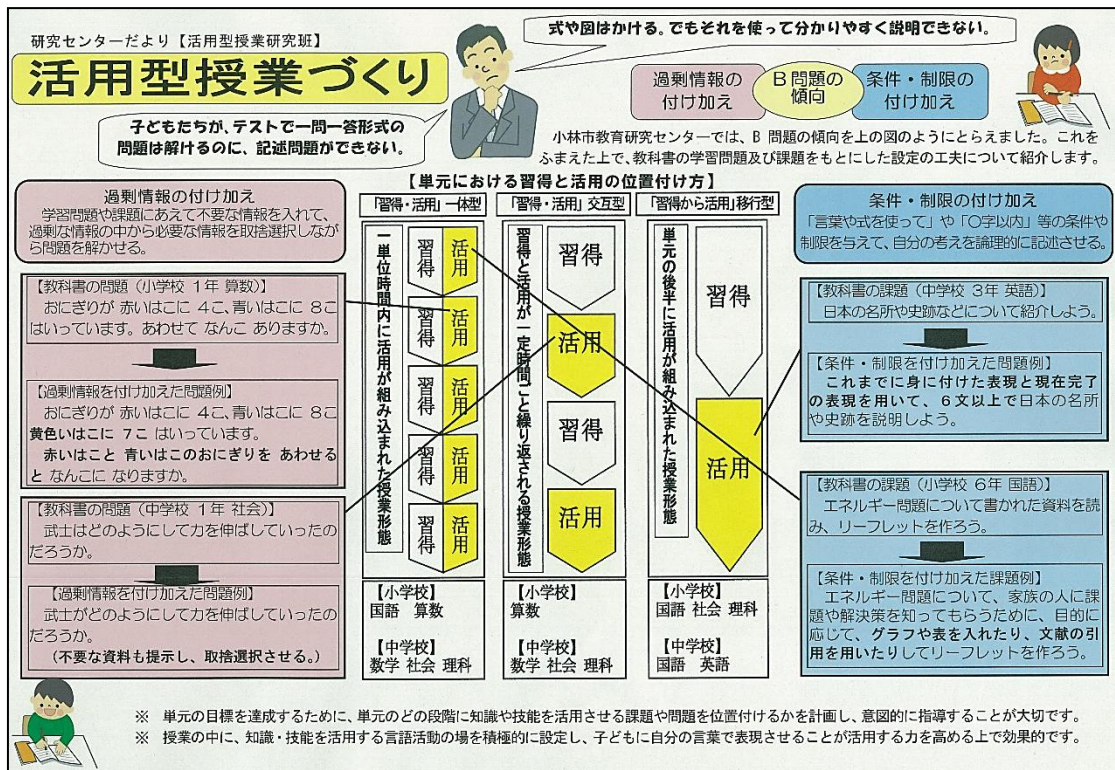
(2) 活用型授業の共同実践に向けたリーフレット作成

「活用型授業」を小林市の教員が広く実践できるようにするために、指導計画作成の参考となるリーフレットを作成した。(図1)

活用する力を高めるためには基礎的・基本的な知識や技能を活用する場面を意図的に設定することが大切である。そのために「B問題分析を生かした学習問題及び課題設定パターン」をもとにした「過剰情報の付加」「条件・制限の付加」の問題例を示し、授業実践が図られるようにした。また、単元や一単位時間のどの部分に、知識や技能を生かす言語活動が位置付けられるかを示し、指導計画を立てる時に参考にできるようにした。

作成したリーフレットは、各学校で、教員が必ず出入りする印刷室の壁面に掲示すること

で、リーフレットを見る機会を増やせるようにした。そのことを通して、活用型授業についての理解を深め、各自の実践につなげられるようにした。



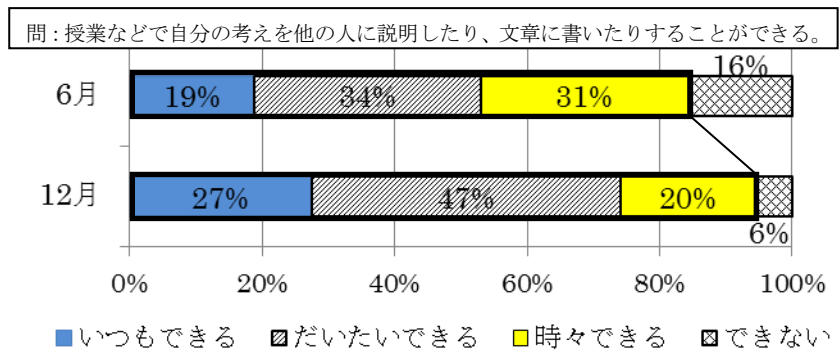
【図1 活用型授業 リーフレット】

(3) 授業研究会における活用型授業の啓発

リーフレットで示した「過剰情報の付加」「条件・制限の付加」を取り入れた活用型授業に関する研究会を行った。研究会は、研究員及び各学校から1名以上の教員に出席してもらった上で実施した。研究授業後の研究会では、ワークショップ型の手法を取り入れ、授業の成果と課題を確認し合うとともに、日々の実践における活用型授業づくりの苦労や工夫などについて協議し合い、各学校で活用型授業の実践が図られるようにした。

(4) 児童生徒の意識調査

6月と12月に小林市内の抽出した児童生徒を対象に意識調査を行った。「授業などで自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることができる」については、6月に比べ、12月は「できる」と答えた児童生徒が増えた。(図2) これは、日々の学習で活用型の問題や課題を解決する機会が増えたからだと考える。さらに、児童生徒が途中までしか説明や解決ができない場合でも、互いに学び合ったり、補完し合ったりするなど、途中までの過程を認める教員や友達の支えにより、解き方や考え方を学び、自信を高めることができたからだと考える。



【図2 児童生徒の意識調査の結果】

3 TSM活用研究班の取組

TSMとは、平成24年度に本市教育研究センターが独自に、算数・数学科「図形」領域、国語科「伝統的な言語活動と国語の特質に関する事項」において開発した指導資料である。基礎的な知識や技能を確実に習得させるための授業における手立てのひとつで、当該単元に関わる9年間の系統等が分かるようにした。平成25年度は活用型授業でTSMをより効果的に活用していくために、授業場面ごとに活用方法を整理した。本年度は、より多くの教員にTSMを利用してもらうために啓発と普及を進めた。

(1) 指導時期一覧表の作成

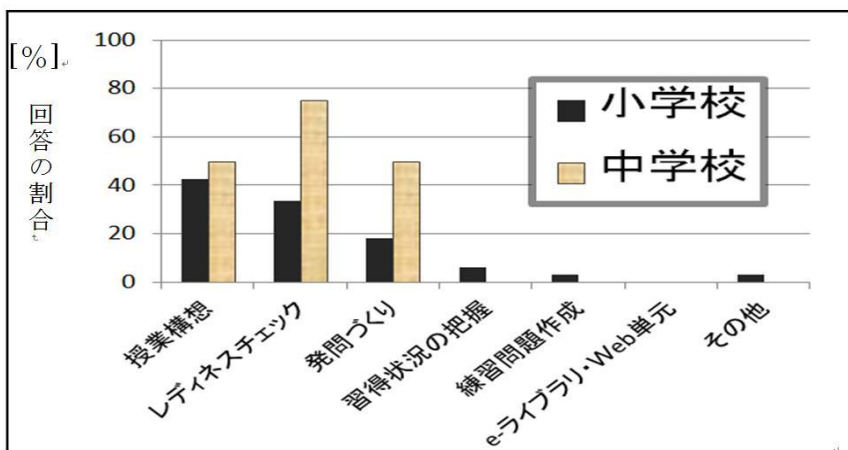
TSMを普及するための足がかりとして、「算数・数学科（図形領域）に関わる指導時期一覧表」を作成した。（表1）この表により、小・中学校における算数・数学科の図形領域がどの時期に実施されるかが明確になり、教員が当該単元の授業を構築する際にTSMを利用しやすくなった。

【表1 算数・数学科（図形領域）に関わる指導時期一覧表】

		算数・数学科【図形領域】に関わる指導時期一覧表								
		小林市教育研究センター								
月	週	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
4	1				角とその大きさ		対称な図形			
	2				〃		〃			
	3									
1	1		〃					〃	〃	
	2							〃	〃	三平方の定理
	3							〃	〃	〃
2	1					円と正多角形		〃		
	2					〃		〃		
	3	ものいし			直方体と立方体	角柱と円柱				
3	1				〃	〃				
	2				〃					
	3									
単元ごとの総時数	いろいろなかたち (4時間) かたちづくり (6時間) ものいし(1時間)	三角形と正多角形 (12時間)	円と球(8時間) 三角形(7時間)	角とその大きさ (10時間) 直方体と立方体 (14時間) 直方体と立方体 (11時間)	合同な図形 (11時間) 円と正多角形 (7時間) 角柱と円柱 (6時間)	対称な図形 (10時間) 図形の拡大と縮小 (10時間)	平面図形 (16時間) 空間図形 (16時間)	図形のつくりかた (16時間) 図形の性質と証明 (16時間)	図形と相似 (24時間) 円の性質 (9時間) 三平方の定理 (12時間)	

(2) アンケート調査の実施

7月に行った本市教育フォーラムにおいて、TSMの啓発活動及び各学校へ指導時期一覧表の配布等による普及活動を行った。その後、TSMを活用して授業を行った全教員へアンケートを実施した。その結果「どのような場面にTSMを活用しましたか。」という問いについては、「授業構想段階」、「レディネスチェック」、「発問づくり」での活用が多いことがわかった。（図3）また、「TSMを使って役立ちましたか。」について



【図3 「どのような場面にTSMを活用しましたか。」の回答】

は、回答者の9割以上の教員が「役に立った。」と回答し、授業前や授業の導入段階で利用し、系統的な指導に特に役立ったことが分かった。

指導に活用した教員の感想の中には、「先を見通した授業構想ができる。」「おさえるべきポイントが明確で分かりやすかった。」「eライブラリを用いて電子黒板上で既習事項を適宜振り返ることができ、生徒の理解を深めることができた。」などの有益な回答もあり、TSMの有効性が認められた。

4 ICT活用研究班の取組

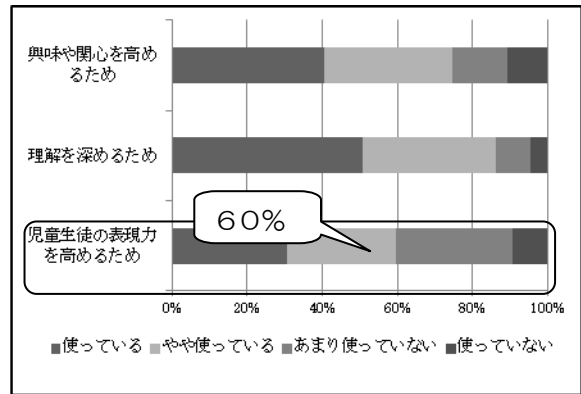
本市は、昨年度までにデジタル教科書、実物投影機、学習指導用ソフトウェア「eライブラリ」等のICTを小・中学校の全学級に導入した。そこで、個々の教員がICTを効果的に活用していけるようにするための研究を進めていくこととした。

(1) ICT活用の実態調査

市内全小・中学校教員のICT活用に関する実態・意識調査を実施した。

調査の結果、実物投影機は授業における活用頻度が最も高いことが明らかとなった。しかし、活用の目的については、理解を深めたり、興味や関心を高めたりするための使い方が最も多く、児童生徒が発表で使うなどの表現力を高めるための活用は少なくなっていることが分かった(図4参照)。

また、「eライブラリ」の活用については、普段の授業で使用していると答えた数は、約23%とあまり活用されていないことが分かった。



【図4 実物投影机を使う目的】

(2) ICT活用の啓発促進

ア リーフレットの作成

教員の実態・意識調査の分析から明らかとなった課題に対して、次のようにリーフレットを作成し、全小・中学校教員へ配布し、啓発を図った。

○ 第1回リーフレット

「ICTの基本的な活用の仕方」

…本市ICTの特長や具体的な操作方法について

○ 第2回リーフレット

「ICTの発展的な活用の仕方」

…eライブラリや実物投影机の発展的な活用場面・方法について

○ 第3回リーフレット

「児童生徒のICT活用法」

…習熟を図るための活用や表現力を高めるための活用について

(図5参照)

イ 研究授業におけるICT活用

本市教育研究センターの研究授業においてもICTの活用を行い、授業におけるICTの具体的な活用方法について啓発を行った。

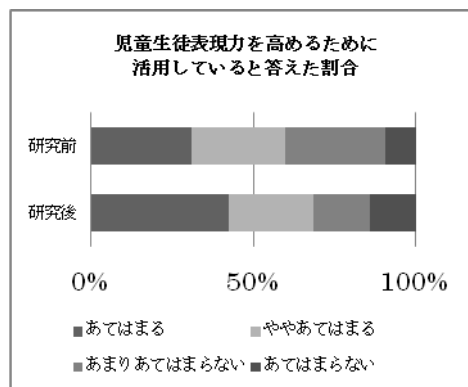


【図5 第3回リーフレット】

小学校第2学年算数科の学習では、課題を提示する場面でプレゼンテーションソフトを利用して児童が視覚的に問題場面を理解できるようにし、ノートにまとめたことを実物投影機に映して発表させた。中学校第1学年理科の学習では、課題提示や実験の手順を提示する場面でプレゼンテーションソフトを利用してテンポ良く確認できるようにし、まとめる際には生徒のワークシート画像を提示して、理解につなげることができた。

ウ アンケートによる追跡調査

リーフレットの配布や研究授業におけるICT活用の啓発活動を行った後に、教員の意識がどのように変容したか、アンケートによる追跡調査を行った。実態調査と比較すると、特に課題であった「児童生徒の表現力を高めるための活用」について、活用していると答えた割合が60%から70%へと向上した。(図6)また、活用の少なかったeライブラリについては、利用率が33%となり、およそ10%向上した。リーフレットの内容を課題に沿った内容で全小・中学校教員へ配付したことが効果的であったのではないかと考える。



【図6 アンケート結果】

5 検証授業の実際

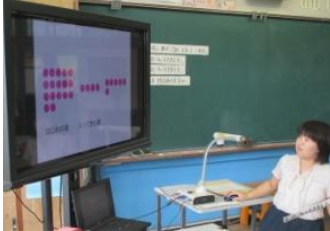
今年度は、研究の実践を2期に分け第I期を「プチ授業実践及び課題把握」とし、本教育研究センター研究員が各自授業実践を行いながら、これまでに構築した理論の確認及び課題把握を行った。第II期は「全体実践期」とし、I期での実践から見られた課題や視点にそって授業実践することで、これまでの研究の成果を児童生徒の姿や教員の指導の変容から把握することを目的とした。さらに、検証授業を広く市内の教員に公開することで取組の普及を図ることとした。



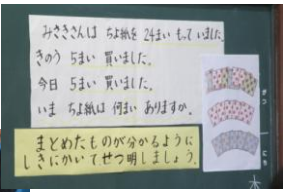
(1) 検証授業I (小学校第2学年 算数科 単元名「ふえたりへったり」)

<本時の目標>

- 増増の数量に着目し、まとめて考える考え方で解くことができる。

授業視点1	学習問題及び課題設定パターンを活用して、「条件を付加」した問題を設定し、言語活動を行うことで、児童の思考力・判断力・表現力を高めることができるか。
授業視点2	習得を踏まえて、活用の段階に進む指導過程は、児童の知識・理解、技能を生かして活用する力を高めることができるか。

段階	学習内容及び学習活動	活用型授業の視点に立った授業の考察
つかむ	1 前時までの復習を行う。 ・ 順に考えて ・ まとめて考えて 2 本時の学習問題を知る。 ちゅう車場に 車が 17台 とまっています。 そこへ 4台 入ってきました。 また 6台 入ってきました。 車は 今 何台ありますか。 ○ 言葉を整理し、絵で確認する。 ・ 17台とまっている→はじめの数 ・ 4台入ってきた→入ってきた数 ・ 6台入ってきた→入ってきた数 ○ 情景図に表す。	① レディネスチェック ○ 前時の説明話型を教室横に掲示してあったことで、レディネスをそろえることができた。 ○ ICTを活用したことで、学習内容の理解を高めることができた。 

つかむ	<p>3 本時のめあてをつかむ。 まとめるものは何かを考えてとこう。</p>	<p>② 問題の提示及びめあての設定</p>
見通す	<p>4 学習の見通しをもつ。 ○ 解決方法と答えの見通し ・ まとめて考える。 ・ 17台よりも増える。</p>	<p>③ 考える場の設定</p> <p>○ 導入段階で、まとめて考える解決方法については確認できていたので、めあての視点にそって児童の思考を焦点化することができた。</p>
調べる	<p>5 個人で問題を解決する。 ○ 情景図をもとに立式し、答えを求める。</p>	<p>④ 考える場と表現する場の設定</p> <p>○ 前時の説明話型を提示していたことにより、筋道立てて考えることができ、ほとんどの児童が自力解決できた。 ○ 図を描かせておくことで、式と図と説明をつなげて表現することができた。</p>
深める	<p>6 課題について話し合う。 ○ ペアで解決方法を伝え合う。 ○ 全体で話し合う。 ○ ペアで再度確認し合う。 ○ まとめをする。</p>  <p>増えた数をまとめて考える。</p>	<p>⑤ 考える場と表現する場の設定</p> <p>○ ペアで自分の考えを説明する時間を設定したことで、自己存在感を高め、自信をもって説明したり、発表したりすることができた。 ○ 実物投影機や黒板での説明の後、全体で確認。その後、ペアで確認という流れを繰り返すことで、理解を深めることができた。</p>
確かめる	<p>7 適用題に取り組む。 ・ 教科書 P102②</p>   <p>8 本時の学習についてまとめる。</p>	<p>⑥ 課題設定の工夫 授業視点1</p> <p>○ 「まとめたものが分かる式をかき、丸で囲む」と「説明する」という条件を付加したことで、児童は式の意味を考え、丸をつけて自分の考えを明確にできた。さらに式の意味をふまえて、説明に生かすことができた。 ○ 確かめる段階を10分確保できた。児童が思考、判断、表現するのに十分な時間であった。</p> <p>授業視点2</p> <p>○ 前段階において立式や言葉に着目したことで、児童がまとめるところを理解して問題を解くことができた。 ○ 児童は流れに沿って説明できたが、考えを発展させたり、確かに理解したりしていたか分からなかった。また、活用できたかどうかをどう評価するのか、判断が難しかった。</p>


(2) 検証授業Ⅱ (中学校第1学年理科 単元名「物質の状態とその変化」)

<本時の目標>

- 蒸留によって得られる液体成分に興味をもち、調べようとする。
- 沸点の違いによる物質の分離について、自らの考えを整理し、表現することができる。

授業視点1	既習事項を確認し、それらを活用する調査活動や表現活動を取り入れれば、生徒が意欲的・主体的に学習に取り組み、習得した知識を活用する力を高めることができるか。
授業視点2	本時学習内容をまとめる際の条件として科学用語をキーワードとして提示すれば、自らの言葉で表現し説明することができるか。

段階	学習内容及び学習活動	活用型授業の視点に立った授業の考察
つかむ	<p>1 前時までの学習内容を振り返る。</p>   <p>2 本時の学習課題を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 混合物からエタノールをとり出すことができるだろうか。 </div>  <ul style="list-style-type: none"> ・ ワイン ・ ウイスキー ・ 除菌アルコール 	<p>① レディネスチェック 授業視点 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ プレゼンテーションを活用し、物質の状態変化などの既習事項の内容をテンポ良く確認することができた。 ○ 今回の授業で使う既習事項を確認することで、生徒のレディネスをそろえることができ、まとめの段階での表現の手助けを行えた。 <p>② 課題の提示およびめあての設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ ICTを活用し、動画を使うことで、生徒の興味・関心を高め、実験への動機付けを行うことができ、生徒が意欲的に取り組む手立てとなった。 ○ 思考力を高めるために日常にある混合溶液を取り扱ったことで、生徒の中に新たな疑問が生まれ、学習意欲を高めることができた。
見通す	<p>3 実験方法を確認する。</p>  	<p>③ 考える場の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 実験を正確、安全に行うためのポイントや注意点をICTを活用して提示したことで、視覚的な理解を促すことができた。
調べる	<p>4 実験を行う。 蒸留実験を行い、得られた液体の性質を調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ においをかぐ。 ・ 火を近づける。 	<p>④ 考える場と表現する場の設定 授業視点 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ つかむ段階で既習の実験方法を確認したことで、習得した知識や技能を使いながら、生徒が主体的にグループで協力して実験を行うことができた。
深める	<p>5 考察を行う。 各班で示された考察をもとに、抽出した液体がエタノールの多い液体になる理由を全体で確認する。</p>  	<p>⑤ 考える場と表現する場の設定 授業視点 1</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 実験結果の根拠を既習事項と関連させて考えさせるために、グループの話し合いを行った。そこで出た意見をもとに、全体での話し合いを行うことで、生徒はより深く思考し、活用する力を高めることができた。
まとめる	<p>6 学習問題を結論づける。 本時学習内容を振り返り、学習問題を結論づける。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> 沸点と混合物の2つのキーワードを用いて結論を書きなさい。 </div>  <p>沸点の違いを利用することによって、混合物からエタノールをとり出すことができる。(蒸留)</p>  	<p>⑥ 課題設定の工夫 授業視点 2</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 科学用語をキーワードとして取り上げ、科学的思考が高まるように工夫したことで、学習課題のまとめを自力で考える生徒の姿が見られた。 ○ ICTを使い、モデルとなる生徒の結論の書き方を即座に提示したことで、評価の基準を示すとともに、全体指導を行うことができ、生徒の理解を深めることができた。

確 か め る	<p>7 説明を聞き、身近に利用されている 蒸留への理解 を深める。</p>		⑦ 振り返る場の設定
			<p>○ 確かめる段階で、実感を伴った理解を図るために、身近なところで生かされている蒸留の例（蒸留による石油の精製）を提示したことで、生徒は学んだことを活用して日常生活の事象を意味づけることができた。</p>

Ⅶ 成果と課題

1 成果

- 活用型授業の実践回数を増やし、実践で得たことを市内の教職員に啓発したことにより、市内で約160名の教員が活用型授業を参観したり、実際に授業実践を行ったりするなど、全国学力・学習状況調査の「B問題」を意識した授業実践が増え、活用型授業に対する理解と授業実践を広げることができた。
- TSM、ICTの活用について、「指導時期一覧表」や「リーフレット」を作成し配布したことにより、それぞれを活用した授業実践が増え、今後も活用したいという意識の高まりがあった。

2 課題

- 研究の結果と児童生徒の学力の向上についての相関について、今後の各種学力調査等の結果を継続して見ていく必要がある。
- 今後、各学校の研究との連携を図りながら、市内全体での共同実践の意識をさらに高め、一貫した研究としていく必要がある。

○ 引用・参考文献

- ・『小学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『中学校学習指導要領』株式会社東洋館出版社
- ・『平成24年度 調査報告書（第29号）』小林市教育研究センター
- ・『平成25年度 調査報告書（第30号）』小林市教育研究センター
- ・『先生と教育行政のためのICT教育環境整備ハンドブック 2013-2014』日本教育工学振興会

○ 研究同人

所 長	中屋敷史生	(小林市教育委員会教育長)	班長(ICT)	郷田良太郎	(小林市立永久津小学校 教諭)
主任指導主事	河野 康男	(小林市教育委員会学校教育課教育指導監)	副班長(ICT)	杉田 知穂	(小林市立南小学校 教諭)
事務職員	古沢 博文	(小林市教育委員会学校教育課主幹)	研究員	小山 廣人	(小林市立細野中学校 教諭)
指導主事	岩切 淳	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研究員	坂本真理子	(小林市立細野小学校 教諭)
指導主事	隈元 正敬	(小林市教育委員会学校教育課指導主事)	研究員	下野 雅代	(小林市立三松小学校 教諭)
主任研究員	今藤 誠一	(小林市立西小林小学校 教頭)	研究員	勝吉 千穂	(小林市立須木小学校 教諭)
運営委員	財津新一郎	(小林市立野尻小学校 教諭)	研究員	松吉 啓二	(小林市立西小林小学校 教諭)
副運営委員	内山田博文	(小林市立小林小学校 教諭)	研究員	田上誠一郎	(小林市立小林中学校 教諭)
班長(系統)	市橋彦司郎	(小林市立西小林中学校 教諭)	研究員	尾崎 瑞代	(小林市立永久津中学校 教諭)
副班長(系統)	田口 正子	(小林市立東方小学校 教諭)	研究員	内村 裕子	(小林市立三松中学校 教諭)
班長(活用)	黒木 徹郎	(小林市立栗須小学校 教諭)	研究員	本菌 理子	(小林市立東方中学校 教諭)
副班長(活用)	岩崎 香恵	(小林市立野尻中学校 教諭)	研究員	松田 裕子	(小林市立須木中学校 教諭)

○ コンサルタント

大木場 俊弘 (小林市立西小林小学校 指導教諭)	平川 康子 (小林市立小林小学校 指導教諭)
赤崎 好次 (小林市立三松小学校 指導教諭)	中山 新吾 (小林市立三松中学校 指導教諭)